ファンタシースターポータブル２i～異世界の５人～

サイクロン&ハリケーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ファンタシースターポータブル２ｉ～異世界の５人～

【Ｎコード】
Ｎ４７３６Ｚ

【作者名】
サイクロン＆ａｍｐ；ハリケーン

【あらすじ】
それは遠い星のお話。軍事会社リトルウィングにルーク・フィレンという青年がいた。彼は亜空間事件を解決した英雄である。
そして欠片事件から半年後がたったある日、何やら怪しい５人がある会話をしている。彼等は何者なのか、まだ知るのは先の事であった。
～リトルウィングを飛び出したルークは、ルークの妹、弟に３年ぶりに再会する。そしてルークは自分の本名である、ディオ・ルタ・

オルテガとして、生きることに決めた。そして、ディオンと話をしてる途中にソロから通信が入る。そのない用はグラールに関する事だった〜

プロローグ：謎の5人（前書き）

初投稿です。自信がないですが、どうぞ御覧ください（ちなみに主人公はまだ出ません）。

プロローグ：謎の5人

？「ここは、どこだ？」

？2「どうやら成功したみたいだね。」

？3「あぁ、そのようだな。」

？「失敗するかと思ったが・・・・、何もなくて良かった。」

？4「失敗するわけないッスよ。俺が造ったんッスよ」

？5「その様なしゃべり方だから、そう言われるんだ。」

？2「でも、彼の腕はたしかだよ？」

？4　「良いこと言ってくれるじゃないッスか。」

？「そんなことより、本当に大丈夫なのか？」

？5「あぁ、大丈夫だ。準備はできてる。俺達の目的を達成させよう。」

？「ふっふっふ、そうか。」

？3「時間もないし、もう行こうぜ。」

？2「そうだね。」

？5「まてよ、先々行くのは良くない、そうだなまずは・・・。」

プロローグ：謎の5人（後書き）

うーん、とりあえずここまですね。誤字、脱字がありましたら、教えてください。

第一話：依頼　1（前書き）

続けて投稿です。前回は会話だけだった。でも後悔はしてないようなあるような。
まぁ前回は気にせず御覧ください。

第一話：依頼　1

～マイルーム～

ここの部屋に1人の青年がいた。彼の名はルーク・フィレン、亜空間事件を解決した英雄である。だが、今は彼はベッドで寝ている。病気出もなく怪我したわけではない。彼に取って久しぶりの休日になる・・・・はずだった。

コンコン

「はい。」

「ルーク？いる？」

「（うるさいのが来たな）あぁ」

扉が開き姿を見せたのはエミリアだった。

「何よ、その返事は？」

「別に（言ったら殺される）で、何のようだ？」

「うーん、実はさ。あんたにお願いしたい事があるの」

「なんだ？」

「実はナギサに声をかけたんだけど、依頼が入っていけなくなった

んだ。」
「んで？」
「だから、あんたに来てもらいたいんだ」
「どこに？」
「依頼」
「依頼？・・・・悪いが、今日は俺は休・・・・」
「お父さんに声を掛けたら、ルークと行けと言われた」
「おいおい・・・・・」
「ルーク・・・・お願い」
少し考えて、ため息を付き
「わかったよ。付いて行けばいいんだろ？」
と答えエミリアが笑顔で
「ありがとう」と答えた。
「やれやれ」と言いながらベッドから出でる。
「依頼内容は？」とエミリアに聞く。
「うーん、何かパルムで不審な5人を見たんだって。」
「その5人を何者か調べろと。」

「そう、その通り」

「さっさと終わらせよう。せっかくの休日なのに仕事するなんて」

「ぶつぶつ言わないの。はやくいこ」

「やれやれ」呟きながら、部屋を出た。

第一話：依頼　1（後書き）

やっぱり小説は難しいですね。でも頑張ります。

・・・・うん、頑張る

第一話：依頼２（前書き）

少し編集しました。

ルーク「編集して、余計変になったんじゃないのか？」

そ、そんなことないさ・・・。

第一話：依頼2

〜〜パルム草原〜〜

依頼を受けたエミリアと無理やり依頼を受けさせられたルークがいた。

「エミリア？ここに依頼にあった不審な5人を見た場所か？」

「うん。そうだけど、誰もいないね？」

「だが、油断はするなよ。いきなり襲って来るときもあるからな。」

っとエミリアに注意を促した。

「わかった」っと返事をするエミリア。

「とりあえず、辺りに誰かいないか、捜索するか。」

「そうだね、まずは人を探さな・・・・」

「！！？エミリア！！伏せろ！！」と叫ぶルーク。

「え？」

「ちっ」とエミリアを無理やり右に押す。

「痛っ」と地面に尻餅をついたエミリアが声を出す。

「くそ、どこからだ」辺りを見渡すルーク。っとそこに。
「あ～あ、外しちゃった。結構自信あったんだけどなぁ～～。」っと声がした。
「誰だ！！」っと声がした方向に声を出した。
「普通、自分から名乗るものでしょう～？礼儀をしらないの～？」
「なに？」
「いたたたっ」お尻を擦りながら立ち上がるエミリア。
「大丈夫か。エミリア？」
「人を押し倒しといて、その台詞言うかな？まぁ大丈夫だけど。」
「わりぃ、その方法しかなかったから。」
「いやいや、その他にも方法があるしょう！？」
などの会話をしていると、
「何？漫才でもやってるの～～？あんまり面白くないよ～～」
「姿を見せないお前に言われたくない。っていうか漫才なんてしていない」と声がする方向に喋る。がしかし、
「どこ見て喋ってるの～、後ろだよ～～。君の後ろ～」

「「！！？？」」と振り向く2人。

「いつからそこに？」っと、ルークが質問をする。

「『お前に言われたくない』って辺りかなぁ～～？」

「ううう、何かしゃべり方が腹が立つ。」っとエミリアが言う。

「あははは、いい慣れてるから、痛くも痒くもないよ～～。どう～？余計に腹が立ったでしょう～？」

「それより、どうやって後ろに？」ルークが質問をする。

「あまり腹が立たなかったみたいだね～、まぁ、いいや。それより答えないとね～、君の質問に～。簡単だよ～。僕ちんの特殊能力だよ～。」

「特殊能力？」

「特殊能力って言っても、ピンと来ないと思うよ～。まぁ、さらに簡単に言うとね～、・・・・僕は普通の人間じゃあないんだよ。」言い方が少し悲しそうに話す。

「えっ？」

「でも・・・・、どうでもいいことだよねぇ～。おっと忘れるところだったよ～。」っと、何かを思い出したかのように、背筋を伸ばして喋る・・・・が。

「実はさ～、君達にお願いがあるんだ～」全く礼儀のない言いかでルークに言う。

「誰がお前のお願いを聞くもんか。」っと、そう答えるルークに。

「ほんと。襲撃しといてなによ、それ？しかも、礼儀がまったくないし」
エミリアもそう答える。

「困っている人を助ける仕事なんでしょう～？助けてよ～。子供だよ？僕ちん」

「子供も大人も関係ない。襲撃した理由を聞き出してやる。っていうか自分からいうか？『子供だよ？』って」っと言いながら、シップウジンライを構える。

「子供だから、子供って言っただけだよ～。それよりなに～？子供に武器使うの～？大人げないなよ～？ま、武器を使っても君は勝てないけどね～」

っと言いながらゼロセイバーを構える。

「エミリア！！下がってろ！！」

「ルーク、あたしも戦うよ」

「パートナーの言う事聞くもんだよ～～。って君が戦っても足手まといになると思うよ～。」

っと笑いながら言う。

「うっさい、あんたに聞いて・・・・」

「エミリア。下がってろ・・・・大丈夫、そう簡単にやられないさ。」っと真剣な顔でエミリアに言う。エミリアも観念したのか、

「わかった。」っと、答えた。

「さてと、準備はいいか？」っと子供に言う。

「僕ちんは、いつでもいいよ～～。あ、そうそう、僕ちんの名前はミケ。ミケ・ラン・ジャータン」

そしてミケはルークに飛び掛かる。

第一話：依頼２（後書き）

とりあえず、ここまで。

ルーク「やっぱり、内容が」

誤字、脱字がありましたら教えてください。

ルーク「無視するなよ」

第一話：依頼３（前書き）

初戦闘シーンです。

ルーク「俺の出番が多くなるわけだ（内容は心配だけど）」

では、どうぞ

第一話：依頼3

「ふっ、遅いな」っといきなり飛び掛かるミケに対し、右側に避け、ミケに攻撃の体勢をしようとした時、

「君がね～」っと言った瞬間、　地面に左手を付き、左手をグイッと地面を押し飛び上がり、ゼロセイバーをしまい、インフィニットブラスターを構え、ルークに射つ。

「！！！」

攻撃の体勢に入っていたせいか、顔を左に避ける事しか出来ず、２つの弾の内、一発頬にすれた。そして、そのすれた所から血が出てきた。

「ルーク！！」っと叫んだエミリアが戦いに加わろうとしたが、

「下がってろっていただろ！！」っとルークが叫ぶ。

「あんな奴、１人で戦おうなんて、言う方がおかしいよ！！」

「あはははは、仲間割れしてる～～」っと地面に着地していたミケが、いつの間にかインフィニットブラスターをしまい、ゼロセイバーを回しながら、嘲笑う。

「ちっ、調子に乗りやがって」

「ルーク！！」

「・・・・。分かったよ、だが、無理だけするな」

「あんたも、無理はしないでよ」

「あぁ、分かった」

「あちゃ～、2対1になっちゃった～～。でもね～、僕ちんはね～、2対1でも勝てるんだよね～。」ゼロセイバーを回しながら言う。

「その自信、いつまで続くと思うなよ」

「パートナーに『下がってろ』っといった奴がそのセリフって・・・・あはははは、変なの～～。」

「お喋りは、ここまでだ」っとミケに睨み付け、シップウジンライをしまい、アカツキ・印を持ち、ミケに向ける。

「あたし達をあまりなめないで」クラーリタ・ヴィサス?を持つエミリア。

「別になめてないけどな～、」っとまだ嘲笑ってるのか、ゼロセイバーを回してる。

「その言い方とその態度が腹が立つっての。」っとエミリアが言う。

「あっ、そうなんだ～、だったらねぇ～」っとゼロセイバーを回すのをやめ、

目をつぶるミケ。そして・・・・ゆっくり目を開け・・・

「・・・・・、普通に喋ればいいんだね」っと言い、ゼロセイバーをしまい、何やら構えをとり、そして・・・・　。

「じゃあ、戦うことも普通にいかせてもらうよ。もう手加減なしだよ！！本気でいくからね！！」っと言った瞬間体が光始めた。

「「！！！」」

2人が驚く。

2人の前に姿を表したのは、暴走中のナノブラストの姿であった。

「ばっ、バカな」っと驚くルーク

「嘘でしょう！？何でヒューマンがナノブラストができるのよ！！」っと叫ぶエミリア。

（言い忘れましたが、ミケはヒューマンです）

「言ったはずだよ、僕は普通の人間じゃあないって、あと1つ言っとくけど、僕のナノブラストは時間制限はない。僕のナノブラストを止めることが出来るのは」

「お前を倒す事だ。」

「そのとおり。それと、自分の意思でも止めることも出来るんだ。さてと、お喋りは終わりだったね。じゃあ望み通り終わらしてあげるよ。君達が死ぬことで。」っとルークに飛び掛かりあっという間

にルークの目の前に来ていた。

「!?（速い）!!」っと思ったルークだが、

ドン!!

腹に蹴りを入れられ、吹っ飛ぶルーク。

「グッ!!」ルークが飛ばされる。

しかし、凄いスピードでルークに追いついたミケがルークを踏み台にするかのように、おもいっきり腹を踏む。そしてルークが地面に叩きつかれる。

「ぐ、ぐはぁッ!!!」地面に叩きつかれたと同時に口から血を出す。

「ルーク!!」っと近寄るが、

「・・・・終わりだ、ルーク・・・・・」っと言い残しルーク止めを指そうとしたが、。

・・・・・。

「言ったろ？お喋りは終わりだって。」っとニャリと笑ったルーク。

「ばっ!!!」っとびっくりしたミケ。その訳は・・・・ルークがアカツキ・印で攻撃を防いでいたのだ。

「バカな、なぜ攻撃を防げられたんだ。君は完全に万事休すだったはず！！」っと焦るミケ。

「俺がいつ万事休すに追い詰められたっと言った？」っとそえ答えるルーク。

「まぁ、お前の攻撃を耐えられたのは亜空間事件を乗り越えたおかげかな～。いや～、結構、力が付いたもんな～」っと今度はルークがミケ言い方だった言い方でミケを嘲笑う。

「ふざけ・・・、ん？亜空間事件？あぁ、やっぱりそうか。君、亜空間事件を解決し、グラールを救った英雄、ルーク・フィレンか。」

「ご名答。まっ、英雄は余計だかな。」
っと答えるルーク。

「しかし、例え英雄でも、あの攻撃を食らったら誰だって・・・・」

「悪いが、あんな攻撃、何回も食らったらからね。まっ、慣れちゃったってやつ？」っとまた嘲笑うルーク

「くそ、なめがって。どうせ急所を外したにちがいない」っと言ったミケだが・・・・

「ふっ、どうやら、俺たちの勝ちみたいだな。」っと言うルーク。

「えっ？」っと呆気ない言葉で言うミケ。そして、

「！！！」

何かを察知したミケだが、気付くのが遅く何かにぶつかり、遠くに吹っ飛ぶミケ。それはエミリアが放ったミラージュブラスト、コンル（氷刃ノ疾風）だった。

遠くに飛ばされた先には、大きな木が一本立っており、その勢いのまま、ミケは木に叩き付かれた。

バッキィィィ～～ッ

っと木が折れた音がし、勢いが強かったせいか、そのまま木を通り越し、折れた木を少し離れた所で、地面に落ちた。

「ふぅ～～。・・・・（・・・・終わったかのか？）」っと警戒をルークは息を吐く。

「ルーク！！大丈夫？」

「あぁ、何とか。しかし、エミリア？なぜブラストがたまってたんだ？」

「あぁ、それ？実はバスクからもらったのを食べたんだ～。これだよ。」

「ん？そのクッキーみたいなやつ？」

「そうだよ、これ美味しいんだよ～。」

「まぁ戦闘中に食べるのはどうかしてるが、とにかく助かったよ。ありがとな、エミリア。」っとエミリアにお礼をするルーク。

「最初の言葉が気になるけど、まぁいいか。」っと笑うエミリア。

「ふふっ」っとつられて笑うルーク。

「あっ、それよりルーク？あいつどうする？」っとルークに聞く。

「そのままにしとくのは、あれだしな。とりあえず連て帰るか。」

「えっ？」っとエミリアが言った時、

「くっっ」

「「！！！」」

「ま・・まだ・・・・まだだ・・・・僕は・・・・まだ・・・・負け・・・・てない・」かなりフラフラなりながら立つミケ。あまり力が無いのかナノブラストの状態ではない。

「「・・・・」」

そのミケを見たルークとエミリアがそれぞれ違う反応した。

「やれやれ」っとルーク

「あれだけ、やられておいてまだ立つかな～」っとエミリア

「さぁ、こい」っと言うミケだったが、その時。

？「あっ、見つけたぞ、ミケ。」

？２「あの野郎、またやりやがったな。」

「「！！！」」

その声に驚いたルークとエミリアは、声がしたほうを見た。　そこには、２人が歩いてくる。１人はミケと同じヒューマンで１８～１９歳ぐらいの背の高い青年。もう１人はデューマンで１５～１６歳ぐらいのなかなか背の高い少年がやって来た。

第一話：依頼３（後書き）

誤字、脱

ルーク「ちょっと、いいか（怒）」

あれ？何で、怒っ

ルーク「ミラージュブラスト！！！」

ぎゃ～～～～～。

エミリア「誤字、脱字があったら教えてね」

そ・・・・それ・・・・俺の・・・・セリフ・・・・

第一話：依頼４（前書き）

何回も読み直したから多分大丈夫です。

っと言っておきながら、少し訂正しました。

ルーク「また、訂正するんじゃないか？」

そ、そんな事はない、・・・・うん。

ルーク「はぁ～～」

第一話：依頼４

１８～１９歳ぐらいのヒューマンの青年が、ルークとエミリアに近づく。

？「すいません、僕の弟が迷惑をかけましたか？」

？２「兄貴、ミケのあの姿とこの２人の疲れ具合を見る限り、迷惑をかけたに決まってるだろ？」

１５～１６歳ぐらいのデューマンの少年が言う。

「あ、あの～、あなたたちは？」っとエミリアが２人に訪ねる。

？「あぁ、。申し訳ありません。紹介が遅れました。僕の名前は、ディオン。ディオン・バーデン」

？２「俺は、ソロ。ソロ・レスター」

っと青年と少年が自己紹介をする。

「俺の名前は・・・・」

っとルークが自己紹介しょうとしたが、

「君たちのことなら、よく知ってるよ。ルークさんとエミリアさんですよね？」

「「えっ？」」っと驚くルークとエミリア。

「ど、どうして、あたし達の名前を？」

「何故って、お前達よく雑誌などに載ってじゃあねぇかよ」

「雑誌に載ってるだけで、実際パッと見ただけで、分かるものか？」っと聞くルーク。

「・・・・、分かったよ、正直に言うよ。」っとディオンが言う。

「いいのか？兄貴？」

「言わないと、疑われるからね。だが、その前にミケのことで謝らないと」っとディオン。

「まったく、アイツのせいで、仕事もやりにくくなるだらけだ。」っソロが右手を頭に当て、ため息をつく。

「ミケ、こっちにこい」っとソロが叫ぶ。

「・・・・。」ムスッとするミケ。　しかし、

「僕の頼みでも・・・・かい？」っとディオンがいう。

「ッ！！！（顔は笑っているが、なんだ、この威圧感は）」っとルークは感じた。

ミケはしぶしぶ頷き、ゆっくりディオンに近づく。

「瞬間移動みたいな特殊能力が使えるんだから、使えばいいじゃん」っと言ったエミリアだったが、

「力が残ってないから、使えない」っと苛立ちながら言う。

「ミケ！！さっさとこの2人に謝れ」っとミケ言うソロ。

「・・・・ごめん」っとミケが心がこもってない謝り方をする。

すると、

ドカッ！！

ディオンがミケを叩きつけ、ミケの頭を押しながら、

「ちゃんと謝りな？ミケ。」っとディオンが言う。

「痛い痛い、ディオン兄さん、痛いよ。」っと痛がるミケ。

「謝りなさいっと、言ってるんだよ。」っさらに押し付けるディオン。

「うわ〜〜〜、痛そう。」っとエミリアが言った。

「わ、分かった。ご、ごめんなさい！！」っとミケがもう一度謝る。

「いいよ、よく出来たね。」っと言いながら、ディオンが押し付けた手を離す。

「だいたい、人を襲撃しといて、謝るだけでいいのか？」っと疑問がるソロ。

「そうだね、どうしたらいいかな？」っとディオン。

「えっ～～～、僕、謝った意味なくない？」っとミケ。

「・・・もう一度、謝るかい？」っと笑顔でミケに睨む。

「いやいや、もういいよ」

「はぁ～～、どうする？ルーク？」っとエミリアがルークに言う。

「まぁ、俺たちも戦って、ミケに傷付けたしな。」っとルークが答える。

「そうだ、君たちも謝・・・・、痛ッ！！」またディオンに頭を叩きつけられる。

「もう一度、謝りなさい」っとディオンがミケの頭をさっきより強く押しながら言う。

「ごめんなさい！！」っとミケ。

「はぁ〜〜、」また右手を頭に当て、ため息をつくソロ。
「1ついいか？」っとルークがディオンに質問をする。
「はい、何でしょうか？」っと威圧感のない笑顔で答えるディオン。
「お前たちは・・・・」っと質問をしようとしたが、突然、
ピピピッピピピ、
っとエミリアの通信がなった。
「誰からだ？」っとエミリアに言うルーク。
「ええっと、お父さんからだ」っと通信に出る。
『おい、エミリア、ルーク。依頼に会った不審人物の5人がガーディアンズに捕まった。どうやらガーディアンズが巡回中に見つけたらしい。不審な5人なんだが、元ローグス3人と強盗2人だったらしい。どうやら5人で銀行を襲う計画をしていたらしい。やつらの持ち物からそれらに使う道具もあった。
っていう事だから、帰って来てもいいぞ。』
っと通信を切るクラウチ。
「っていうか、依頼を受けてたの忘れてたな。」っと右手を頭に当てるルーク。
「いろいろあったもんね。さすがにもう疲れたよ」っとエミリアが答える。
「そうだな、久しぶり凄い戦いをしたしな」っとルークも言う。

「そういえば、質問があるって言ってたね？」っとディオンがルークに言うが。

「兄貴、俺が見る限り彼らは疲れてるし、長話もあれだ。日を改めないか？それにミケの説教しないと」っとソロが言う。

「えっ～～また～～説教？勘弁してよ。」っと叫ぶミケ。

「う～ん、僕はその意見に賛成だけど・・・・、君たちは？」

「そうだな、とりあえず今日は帰ろうか？エミリア？」

「いいの？ルーク？まだ会って時間も経ってないのに信じていいの？」っと言うエミリア。

「とりあえず、日を改めて話すことにするよ」っと答えるルーク。

「じゃ、この店で話すから・・・・。」っとルークに店の名前が書いたパンフレットを渡す。そして、クイッと首でパンフレットにやる。

「・・・・分かった、じゃこの店で、」っと何かに気がついたルークは、パンフレットをしまいながら、言うルーク。

「じゃ、3日後に」っとディオンが言う。そして、ディオンが

「さてと、ミケ、ソロ行こうか。」っといい何やらボタンをいじっ

てる。数秒後船が真上に止まり、ゆっくり降りてきた。

「じゃ、3日後に」っとディオンが右手をあげながら船に乗り、その後にソロ、ミケが続く。ミケは少しまだ、フラフラしている。そしてミケが振り返り、頭を下げる。

ドアが閉まり、ディオン達の乗った船は立ち去って行った。

「エミリア、俺たちも帰るか。」っとエミリアにいい、

「そうだね、帰ろうか。」っとエミリアが船を呼ぶ。ディオン達の船とは違い、ふねが着くのは遅い。数分後、船が到着し、ゆっくり船が降りてくる。

「さぁ、帰ろうか?」っとエミリアが言う。

「そうだな」っと船に乗ろうとしたが、

「???」っと不意にルークが振り返る。

「・・・・」辺りを警戒してるのか、辺りを見渡している。

「何やってるの〜、置いていくよ〜。」

「気のせいか?」っと警戒していたルークだが、エミリアが急かされたので、急いで船に乗る。

そして、エミリア達の乗った船が飛び立って行った。

・・・・ガサッ!!

？「危ねぇ、危ねぇ、アイツ警戒してたよ」

？2「あの人、なかなかなの腕前だったね。凄い戦いだったね。それもあの子供も」

？3「ま、俺たちの相手じゃないだろう。まだあの腕じゃ」

？5「でも、あいつと戦いたい。っていうか今直ぐにでも」

？「よせ、よせ、まだ俺たちの力を見せるのはあとだ。」

？3「そうだな」

？4「はぁっはぁっはぁ、やっと見つけたッスよ。置いくなんてひどいッスよ」

？「わりぃな、さてと、行くか」

？2「そうですね。私達の計画を達成するために」

第一話：依頼（終）

第一話：依頼４（後書き）

まず１つとして、エミリア達の船を呼ぶようにしたのは、ミケが船を壊してしまうので呼ぶようにしました。

正直に言うと、どうやってパルムに？や船はどうしたの？っと書いてて思ったのでそのような形になりました。

1―1　依頼報告（前書き）

第二話では、ございません。第二話が始まる前ですので、1―1にしました。

最初の1―□　は、　第一話、みたいな、ものです。

では、どうぞ。

1―1　依頼報告

～リトルウィング～

リトルウィングにしたルークとエミリア。そうしてエミリアがルークに言う。

「あんた、本当に怪我、大丈夫なの？」っとエミリアがルークの怪我の心配をする。

「あぁ、何とかな。」っと答える、ルークだが・・・・

「そんなこと言うけどさ、あの時の傷が大きくなったら・・・・」っと言う。

そう、ルークは一度、怪我をしたのである。だがルークは、

「大袈裟だよ。単なる、かすり傷だろ？」っとルークは、言うが。

「あれが、かすり傷って言えたもんね。鍼を縫うほどの、怪我だったのに」

「怪我を心配してくれるのは、嬉しいが、クラウチに依頼の報告しないと。まぁ、不審人物の５人はガーディアンズ達が捕まえたがな」っと言うルークにたいして。

「あの３人の事、話すの？」っと言うエミリア。

だが、ルークは、

「いや、まだ言わない方がいい。彼らを知らなさすぎるからな。」っとルークが答える。

「でも、その怪我を見て、何か会ったって、聞かれたらどうするの？」っとエミリアがルークに聞く。

そしてルークは、

「よそを見したら、崖から落ちたとでも、言えばいいだろ。」っとルーク言う。

「・・・・絶対信用しないと思う。」っとエミリアが呆れながら言う。

「まぁ、その時に、言い訳を考えよう。とりあえず、事務所に行こう。」っとルークがエミリアに言う。

「（スッゴい、心配なんですけど）」っと、口では言わず、心の中で思いながらルークに付いていくエミリア。

～リトルウィング事務所～

プシュー、

っとドアが開き、事務所の中に入る、ルークとエミリア。奥には、クラウチがいた。

「クラウチ。今帰ったぞ」っとルーク。

「おう、帰ったか・・・・。ってか、おめぇ、どうしたんだよ？その怪我は？」っと聞いてるクラウチ。

「これか？油断していたら、原生生物に攻撃された。」っとルークが答える。

「・・・・、そうか。エミリアは怪我はないのか？」っとエミリアも聞く。

「あたしは特に痛いところは、ないよ」っとエミリアが答える。

「んで、何のようだ？」っとクラウチがまた質問する。

「依頼の方は、ガーディアンズが片付けたが、一応、依頼報告をしようと思ったんだよ」っとルークが答える。

そして、更にルークは言う。

「もう少し、あの辺を捜索した方がいいかもしれない」っとルークが答えた。

「えっ？」っとエミリア。

「なにっ？」っとクラウチ。

「どういう意味だ？」っとクラウチが質問する。

「・・・・、単なる勘だ」っとルークが答えた。

「「？？？」」っとクラウチとエミリアが頭の上に、？マークが浮かぶ。

「・・・・それより、ルーク。今日、おめぇ、休みだったな？今日はもういいから、部屋で休め。今日の休日は明日にするからよ。」っと行ったクラウチだが。

「なぁ、クラウチ？その休日、３日後にしてくれないか？」っとルークが言う。

「んっ？何でだ？」っとクラウチが聞く。

「その日、少し行きたい場所があるんだ。もしかしたら、１日になるかもしれないし」っとルークが答えた。

「？？？、まぁ、おめぇさん、が３日後にしたいなら別にいいけどよ」っとクラウチは許可をした。

「（やっぱり、行くんだ・・・・）」っとエミリアが心配そうに、心の中で呟いた。

「じゃ、クラウチ。俺はこれで、失礼するよ」っとルークは、右手を上げ、事務所を出た。

ルークが部屋を出たのを確認すると、

「んでだ、アイツ、何で怪我をしたんだ？」っとエミリアに聞くクラウチ。

「えっ？あ、あいつ、いっ、言ってたじゃん。げ、原生生物に攻撃されたって」っと焦りながら言うエミリア。

更にクラウチは、

「あんな嘘、ガキでも言えらぁ。嘘を聞かされて、素直に、はい、そうですか？って言うわけねぇだろ？だいたい、急に襲われたからと言って、あんな怪我はしないだろ？アイツならなおさら。」っとクラウチが言う。

「うぅぅっ、」っと更に焦り、言葉を失うエミリア。

「・・・・、お前のその焦り様から見て、やはり、原生生物に攻撃されたのは嘘だな？」っとエミリアに聞く。

もう、観念したのか、エミリアは

「うん、」

っとエミリアは頷いた。

クラウチは右手を頭に当て、ため息をつく。

「詳しいこと・・・・、話せるか？」っとクラウチはエミリアに聞く。エミリアは、コクリっと頷き、依頼中に、あったことを話した。

「なるほど、んで、3日後に会おう、ってことで、休日を3日後に

したんだな？」っと難しい顔する。

「うん・・・」っと、エミリアは、頷いた。どこか、元気がない返事だった。

「まぁ、さらに詳しい内容は、アイツから聞くとして、エミリアは今日はもう、休んでいいぞ。」っとクラウチが言う。

「うん、わかった」っとエミリアは答え、エミリアも事務所を出た。事務所出てすぐに、

「クラウチに、話したんだな？」っと不意に右から声がした。

「うぇぇっ？」っとエミリアが驚く。

声がした方を見ると、ルークが立っていた。なにやら怒った顔している。

「クラウチに、話したんだな？って聞いてるんだ！！」っとさっきより大きな声で言う。

「あ、あたしだって、言いたくなかったわよ！！。でも、お父さんに聞かれて、仕方がなく。そもそも、あんたの嘘が、下手だから、こうなったんじゃないの！！？」っとエミリアも怒鳴る。

「だから何か？それで話してしまうのかよ！！」っとルークが言う。

ガヤガガヤ

っと回りが騒がしくなる。

すると、事務所からクラウチ、ウルスラ、チェルシーが出てきた。

「おい、ルーク！！おめぇ、いい加減にしろよ！！」っとクラウチが怒鳴る。

「エミリアの言う通り、正直に話さない、おめぇが悪いんじゃねぇのか？」っとクラウチがルークに言う。

「正直に話さない？それだけ、俺が悪いのか？話せない事を聞くあんたも悪いじゃないのか？」っとルークがクラウチ言う。

「てめえっ」っとクラウチ言うが、

「ルーク！！あんた、本当にいい加減しなさいよ！！」っとまたエミリアがルークに怒鳴る。

「はぁ・・・・、わかったよ・・・・」

っとルークは、そのまま部屋には行かず、マイシップに入って行った。

「てめえ、まだ話しは」っとクラウチが言うが、ルークは無視して、マイシップに乗る。

そして、そのままどこかに行ってしまった。

「エミリアっ？アイツに酷いこと・・・・」言われたのか？って言

おうとしたクラウチだが、

「・・・・」エミリアは涙を流してた。

「エミリア！！」っと心配したクラウチ。

「どうしたんだよ？本当にアイツに酷いこと言われたのか？」っとクラウチが焦って、エミリアに聞く。

「・・・・」エミリアは答えない。いや、答える事が出来ない。エミリアは後悔していた。無駄だとだと分かっていながら、クラウチに嘘を言ったルーク。それなのに、嘘が下手だからっと言い、ルークのせいにした。いや、気にしてるのはそこではない。今までルークとあれほどまで、口喧嘩をした事がない。そして、マイシップに乗るルーク。そう、それはまるで、家を飛び出した自分と似ている出はないか。それをエミリアは気にしていた。何しろ、ルークは戦いで怪我をしている。前の傷も完全に治ってもいないにも、かかわらず。エミリアはそれを気にしていた。

「仕方ねぇ、ルークの方は俺が追う。エミリアはこのまま休め。いいな？」っとクラウチが言うが、

「お父さん、あたしも行く」っと言うエミリア。

「なに？」っとクラウチが聞き返す。

「嫌な予感がするの・・・・」っとエミリア

「嫌な予感だと？ちっ、仕方ねぇ。ウルスラ、チェルシー、ちょっくら、行ってくる。留守は任せたぜ。」っとウルスラとチェルシーに声を掛ける。

「わかったわ。」っとウルスラ。

「ちゃんト、つれテ、帰って来てヨ」っとチェルシー。

そしてエミリアとクラウチはマイシップに乗り込んだ。

1―1　依頼報告（後書き）

登場人物の紹介は、次の話が終了したら、書こうと思います。

○ルーク
○ディオン
○ソロ
○ミケ
○???（次の話に登場）

の五名です（ちなみに、この登場人物の紹介はオリキャラの紹介ですので、エミリア達など紹介はしません。）

誤字、脱字がありましたら、教えてください。

ルーク「次話もよろしく」

1―2　悲しい決断（前書き）

うん、少しずつですが、書くのが慣れました。しかし、もっと頑張ります。
では、
1―2　悲しい決断をご覧ください。

1―2　悲しい決断

～パルム大都市・ショッピング街～

たくさんの人で賑わう、パルム大都市のショッピング街。その中に人の青年が歩いていた。

「はぁ～～」

っとため息をつく青年。そう、ため息をついた青年はルークである。

「俺、何であんな事を言ったんだろ」

っとリトルウィングで自分が言った事を後悔していたのであった。

「あんな事を言って、更に逃げたんだ、帰りにくい」

っとなど独り言を言ってると、　後ろから、

「何をブツブツ言ってるの？」っと声がした。

振り返ってみると、そこには、1人の女性だった。

「・・・・、なんだ、お前か。」っとルークは女性に言った。

「なんだ、っとは何なの？久しぶりに再会したのに、最初の言葉はそれ？」っと女性は腕組みをしながら言った。

「ほんの二年前に会っただろ？」っとルーク。

「違うわよ、三年前よ。お父さんやお母さんの誕生日やお盆（お盆がある設定）に帰って来ないのは、”お兄ちゃん”だけだよ。」っと女性が言う。

「なんど言えばわかる。俺を”お兄ちゃん”って呼ぶなって言ってんだろ。ソラ。」

「お兄ちゃんだからお兄ちゃんって言って何が悪いの？」

「恥ずかしいんだよ！！」っと女性に怒る。

ルークの話していた、女性、ルークの妹のソラ・ミル・オルテガである。

そしてソラは、

「じゃあ、何て呼んでほしい？お兄ちゃん？兄さん？それとも、ディオ兄さん？」

「最後のはやめろ」っとルーク。

「・・・・、いつまで、自分をかくすの？」っとソラ。

「・・・・」っと黙るルーク。

「今まで”ディオ”として生きてきたのに、なぜ偽名を？」っとソラ聞く。

「やっぱり、兄さん。、リトルウィングを辞めるつもりなの？」っ

とソラが聞く。

「あぁ、そうだ。いや、そのつもりだったんだが・・・・。」

っとまた黙ってしまうルーク。

「辞めるに辞められなくなってしまった。」っと続きを言うソラ。

「あぁ、そうだよ。今、思うとなぜ偽名を使ったんだか・・・・」

っと後悔するルーク。

「じゃあ、どうするの？」っとソラが聞く。

「この先もルークとして生きるか、それとも、ルークを捨てて、ディオとして生きるか」っとソラが言う。

「・・・・」下を向くルーク。

「お兄ち・・・、兄さん。」

「・・・・俺は、」っと答えを言おうとしたルークだが、

「あっ、いたいた。ちょっとお姉ちゃん。置いていかないでよ。」

っと後ろから男の子がやって来た。そして、

「もう、酷いよ・・・・って、うわっ、ディオお兄ちゃん。」っと

驚く男の子。

「よぉ、リオル。久しぶり」っと男の子に言う。

「ほんと久しぶりだよ。雑誌などでお兄ちゃんの活躍を見たよ。すごいねぇ、亜空間事件を解決するなんて、しかも英雄だよ」っと笑顔で言うリオル。

この男の子の名前は、リオル。リオル・ルタ・オルテガ。ルークの弟である。

そしてリオルは、

「あっ、しまった。今はディオじゃないもんね。ルークだった。」っとリオルが言う。

「いや、ディオいい。」っとルーク。

「お兄ちゃん？」っとソラが言う。

「今日、限りで、ルークを捨てる。そして今日からディオで生きていく」っとルーク。

「いいの？お兄ちゃん」っとソラ。

「あぁ、もう決めた。・・・・それに・・・・もう、あそこ（リトルウィング）には、帰れないしな。」っとルークが言う。

「じゃあ、退社するの？」っと聞くソラ。

しかし、ルークは、

「いや、ルークは・・・・死んだ事にする。」っとルークが信じられない事を言った。

「「えっ？」」っとソラとリオル。

「退社をすれば、あいつ（エミリア）が探すかも知れないし」っと言うルークだが。

「それだけは、絶対にダメ」っとソラ。

「お兄ちゃんが一番分かるでしょう？もしもルークが死んだ事にしたら、一番悲しむのは、エミリアさんよ」っとソラが少し怒りがこもった言い方をする。

「・・・・」何も言えなくなる、ルーク。

「例え、ルークが死んだとしても、エミリアさんは信じないわ。必ず探すわよ。死んだのは嘘だと自分に言い聞かせて」っとソラが続ける。

だが、ルークは・・・・

「あいつを使えば・・・・エミリアも諦める。」

「まさかっ！！」っとソラが声をあげる。

「そう、あいつを使う」っともう一度言うルーク。

「そんな事をしたら、カイン兄さんが・・・・それに、何よりお父さん達が許さない。」っとソラが怒る。

「カインが言っていた、俺は兄貴の血で救われた。もし、俺が助からなかったら、俺の体を利用しても構わない、っと。何せあいつは俺の血で生きて、そして死んだ。」っと元気なく言うルーク。

「カイン兄さんの奇病の件ね」っとソラが元気なく言う。

「僕も、カイン兄さんの体の事について聞いた。承認として・・・・・。確かに言ってた。俺が死んだら体を利用してもいいって」うつ向きながら言うリオル。

「でも、お父さん達が・・・・」っと言ったソラだが。

「・・・・もう、決めた事だ。父さんも母さんも関係ない・・・・」っとルークは元気なく言う。

「・・・・エミリアさんは・・・・どうするの？」っとソラが聞く。

「あいつは、もう一人前だ、俺がいなくてもやっていける」っと答えるルーク。

「・・・・」これ以上なにも聞かないソラだった。

「まずは、髪型を変えないと。」っと何処かに行こうとするルークに対してソラが言う。

「本当に・・・・良いのね」っとソラが言う。

そしてルークが立ち止まりそして、こう言う。

「ルーク・フィレンは、今日で終わり。俺は、ディオ・ルタ・オルテガだ。それと・・・・お兄ちゃんって呼ぶな。」っと言って歩き出したディオ。いつも通りに言ったつもりだったが、ソラには分かってた。顔はいつもの同じだったが、心はとても悲しんでいた。

ソラとリオルから少し離れた所で立ち止まり、ディオは涙を流した。
そしてディオは呟いた。

「エミリア・・・・みんな・・・・すまない」っと。

そしてまた歩き出したディオだった。そしてディオは通信機とパンフレットを取り出した。パンフレットはディオンからもらったものであり、実はすみの方にディオンの番号が書いてあった。　そしてディオは書いてある番号にかける。

『はい、ディオンです』

「どうも、ルークです」

『・・・・ディオでいいですよ。』

「！！？」

「なぜそれを？」

『ソラちゃんとリオル君に聞いてないんですか？』

「？？？」

『彼女らは、僕達の立ち上げた部隊に入ってるんです』

「なんだって！？」

『驚くのも、無理がないと思います。どうでしょう。会う日にちを

縮めましょうか？もちろんあなたの都合に会わせますよ。ディオさん。』

「明日・・・・」

『？？？』

「明日の１０時に、この店で」

『この店とは、そのパンフレットの店ですか？』

「あぁ」

『残念ですが、その店、潰れてますよ。』

「なにっ！？」

『僕のお気に入りの店があるんですが、その店にしませんか？』

「わかった。なんという店の名前だ？」

『ラッピーカフェと言う店です。名前は、あれですが結構人気の店なんですよ』

「わかった。ラッピーカフェだな」

『はい、あっ、いい忘れました。ラッピーカフェはパルム大都市のカフェ街の中間辺りです。』

「わかった。」

『それでは、また明日』

「まってくれ。」

『はい？何でしょうか？』

「そこで詳しく話してもらうかな」

『貴方も、そのつもりで来てくださいね』

「あぁ、わかった」

『それでは、失礼します』

電話が切れ、ディオは通信機とパンフレットをしまい、歩き出した。

次回

第二話：嘘と真実

1―2　悲しい決断（後書き）

次回、第二話：嘘と真実ですが、その前にオリキャラの登場人物の紹介です。
紹介のキャラは

○ディオ（ルーク）
○ソラ
○リオル
○ディオン
○ソロ
○ミケ　　です。

謎の5人は名前が5人登場次第書きます。　ちょくちょく謎の5人が登場してきます。本格的活動はまだしません。

オリキャラ登場人物（前書き）

無駄な所を省いたことにより、ページが極端に少ないです。

ディオン「少ないのは、貴方の発想力がないからでは？」

ソロ「兄貴の名前、ディオン。そして、英雄の名前ディオ。かなり似てるし、発想力のなさが出てる」

ディオンとディオは、全然違うよ。マカロンとまころんみたいな。

ミケ「M○SP○からとりました？」

そ、そんなことはない。

ディオン「・・・・（目が泳い出ますね）」

ソロ「短いが、見てくれ」

あっ、俺のセリフ・・・・。

オリキャラ登場人物

○ディオ・ルタ・オルテガ
種族：ヒューマン
年齢：２２歳
タイプ：ブレイバー
一人称：俺
髪色：金髪
服装：
イロハフブキ白×黒

今まで、エミリア達に”ルーク”っと呼ばれて、いたが。実はその名前は偽名であり、本名は、ディオ・ルタ・オルテガである。ある事件により、偽名のルークで、暮らしていたが、リトルウィングで偽名を使った事を後悔している。とある、ことでリトルウィングを飛び出したことも後悔している。
　無理矢理、髪型を変えたり、服装も変えた。今後はディオとして、生きていく事を決める。

○ソラ・ミル・オルテガ
種族：ヒューマン
年齢：１９歳
タイプ：フォース
一人称：私
髪色：金髪
服装：カグヤヒラリ

ディオの妹。

頬っぺたの上に赤い模様？みたいなものをつけている。元カーディアンズで、兄ディオが失踪したため、わずが３ヶ月で辞める事になった。再会後は、ディオには言ってないが、ディオンの立ち上げた部隊に入っている。

○リオル・ルタ・オルテガ
種族：ニューマン
タイプ：ハンター
一人称：僕
髪色：茶髪
年齢：１８歳
服装：
パニッシュジャケット

母親の血が多く繋がり、ヒューマンである、兄、姉以外でニューマンとして生まれた。強くなりたかったので、ソラに無理を言ってディオンが立ち上げた部隊に入った。

○ディオン・バーデン
種族：ヒューマン
タイプ：？？？
一人称：僕
年齢：１８～１９歳？
髪色：銀髪
イルミナス・コート

ルーク（ディオ）とエミリアが依頼中にあった青年。常時は笑顔みたいな優しい顔だが、笑顔で、凄い威圧感を出すことも出来る。自分の立ち上げた部隊のリーダー。ある人物を追ってる。

○ソロ・レスター
種族：デューマン
タイプ：ハンター
一人称：俺
年齢：１５～１６歳
髪色：黒髪
服装：
ブレイブスコートシリーズ（黒×暗い青）

ディオンが立ち上げた部隊の副リーダー。ディオの前で、自分の強さを見せてないので、ディオはソロの強さを知らないが、相当のやり手。ミケに対してかなり厳しい。

ミケ・ラン・ジャータン
種族：ヒューマン
タイプ：ブレイバー
一人称：僕
年齢：１０歳
髪色：青髪
服装：
ジャッジメントコート

ディオ（ルーク）とエミリアを襲った張本人。ヒューマンでナノブ

ラストを使える。油断したせいか、ディオ達にやられる。そのあと、無理矢理ディオンに誤らさせられた。何故、ディオ達を襲ったのか、まだディオに言ってない。

オリキャラ登場人物（後書き）

ソロ「なぁ、兄貴？これだけで、俺達の事をわかってもらえるか？」

ディオン「まぁ、自分達がこのような人物だと、今後の話で、わかってもらえれば、いいと思いますよ。」

ソロ「じゃ、書く必要なかったんじゃ・・・・・」

ディオン「あるのとないのでは、違いますからね。」

ソロ「確かにな。んっ？作者がいないな？」

ディオン「彼なら、ディオ君に呼ばれて、出掛けましたよ。」

ソロ「おいおい、・・・・締めはどうする？」

ミケ「僕がやるよ。誤字、脱字がありましたら、お願いします。」

第二話：嘘と真実１（前書き）

第二話です。ほとんどが会話になってますが、気にしないでください。

ディオ「確か・・・・この辺のはず・・・あ、あっちかな」

では、どうぞ

第二話：嘘と真実１

～パルム大都市・カフェ街～

カフェ街に、ディオがいた。ディオンと話をする日になったのだが、ディオは、キョロキョロしている。

「確か・・・・、この辺のハズなんだが・・・・」

どうやら、ラッピーカフェを探しているらしい。っとそこへ、

「もう少し行った先の黄色い店ですよ」っと後ろから声がした。振り返ってみると、ディオンがいた。どうやら声の主はディオンだったようだ。

「あっ、あぁ、そうか」っとディオは、答えた。

「ん？あんた1人か？」っとディオがディオンに聞く。

「えぇ、ソロとミケは、ある調査をしてもらってます。」

「？？？。ある調査？」

「詳しい話は、店で話します。さて、行きましょう」っとディオンは、約束の店である、ラッピーカフェに向かっていった。ディオは

その後を付いていく。

～ラッピーカフェ～

ガチャ、

『いらっしゃいませ！！何名様ですか？』っと定員が答える。

「二名です。」っとディオンが答える。

『では、こちらのお席になります』っと定員がディオ達を席に案内する。

ガヤガヤ、ガヤガヤ

水とおしぼりを持ってきた定員が、

『ご注文が決まりましたらお呼びください』っと定員がディオ達の席を離れる。

ガヤガヤ、ガヤガヤ

「なかなかの店だな。」っと感想を言うディオ。

「それだけではないよ。味もいいんだ」っと答えるディオン。

ガヤガヤ、ガヤガヤ

「・・・・にしては、少し騒がしいな。」

「あれが、原因だと思うよ」っとディオンが指を指す。その先にはモニターがあった。モニターには、グラールチャンネル５がやっていた。どうやらニュースの内容で、ガヤガヤしていたらしい。

『リトルウィングのルーク・フィレン、失踪。今現在、リトルウィングのメンバーがルークの捜索するも、ルークの居場所、確認出来ず。』っとニュースが流れていた。

「・・・・」

「帰らなくて、いいのかい？」

（少し、会話だけになります）

「あぁ、」

「偽装死亡・・・・止めたそうだね。ソラちゃんに聞いたよ」

「あぁ、やっぱり、悲しむ人を見たくない」

「あれほど、ルークは死んだ事にするっと言ってたのに、なんで？」

「・・・・夢を・・・・見たんだ・・・・」

「夢？」

「エミリアの夢だ・・・・、俺が偽装死亡したことにより、エミリアが凄い落ち込むんだ。いや、それだけじゃない。俺は、偽装死亡したことにより、エミリアの笑顔を奪ったんだ。それで、エミリアはもう、笑うことはなかった」

「だから、偽装死亡は止めたのかい？」

「偽装死亡をするっと言った自分がバカみたいだ。（ミカに、エミリアを守って、っと言われたのにな）」

「まぁ、いいんじゃないかな？そういうのは、夢に限るよ。」

「あぁ、そうだな。」

「それより、何か頼も。何飲む？」

「そうだな、カフェオレにしよう」

「じゃあ、僕はホットコーヒーにしょう」

定員を呼んだディオンは、それぞれ注文するやつを頼み来るまで、例の話をする。

「ディオン、早速話なんだが」

「待って、」っとディオンが話を止める。

「どうした？」

「ディオンじゃ、君と被るから・・・・そうだな・・・・ルークにしてくれる？」

「ふざけるな」

「ごめん、ごめん。冗談だよ。ディックっとよんでくれるかい？」

「ディック？」

「僕のもう１つのなまえだよ。ディック・ハリンソン。僕の偽名の名がこれだよ。」

「なぜ、偽名で呼ぶんだよ・・・・」

「だから言ったでしょう？被るからだよ。」

そう、話をしてると、注文した物を持ってきた定員に注文した物を渡され、席から離れる定員。

「っで、まず聞きたいのはあるかい？」っと言うディック。

「あんた達の目的はなんだが」

「目的・・・・か」っとコーヒーを飲みディック。

（会話だけになります）

「実は、僕達は妙な動きをしている５人をおってるんだ」

「妙な５人？」

「君たちが、依頼を受けたのはなんだったかな？」

「怪しい5人の調査。だが、それは元ローグス3人、強盗2人で、それと関係ないぞ？」

「いや、関係あると思うよ。」

「！？」

「依頼を受けた、怪しい5人がその5人じゃなかったとしたら・・・・？」

「！！！」

「そう、その依頼は、まだ終わってない」

「ま、まさか」

「しかも、その5人が、僕達の追っている5人の可能性もあると思うんだ。」

「（あの時の、妙な感覚はこれのことか？）」

「まぁ、決まったわけじゃ無いけど、その可能性が大だね」

「そいつらの名前を知ってるか？」

「いや、今それを調査をしている所なんだ。ってな、訳で、それ以

外なら、話せるよ。」

「なぜ、その5人を追ってるんだ？」

「・・・・、このグラールを救うため」

「なにっ？」

「彼らは、このグラールを支配する可能性のあるだ。」

「なぜ、わかるんだ？調査中なんだろ？」

「彼らに、嫌なオーラを感じたんだ。」

「嫌なオーラを？」

「うん、」

「でも、それだけグラールを支配する奴らって決めつけるなど」

「・・・・確かにね。支配だけで終わればいいけどね」

「どういうことだ？」

「彼らを調査中っと言っても、全然わかってないって事ではないんだ。」

「じゃ、少しならわかるのか？」

「うん、彼らは一人一人それぞれ違う種族だと言うこと。彼らに嫌なオーラを感じた事ぐらいだね。」

「でも、それだけで、そいつらを悪者にするのは・・・・」

ピピピッピピピッ

「あっ、ごめんね」

っと、ディオに謝り、通信に出るディック。

「はい、ディックです」

『・・・・ディックって、なんで偽名使ってんだよ兄貴。』

通信相手はソロだった

「ディオ君と似てるからね。だから偽名の方につかったんだ。」

『オレとミケは分かるが、他の奴らならどうするんだ。ビックリするぞ』

「ごめん、ごめん、気を付けるよ。って、わかったのかい。」

『なぁ、そこにディオの兄貴がいると・・・・っているみたいだな。なら丁度いい。ディオ兄貴も聞いてくれ』

「どうかしたのかい？」

っとディックが聞く。

『あの5人。やはり、兄貴の言う通り、このグラールを支配をするつもりが高い。』

「やっぱり、そうだったんだね。」
（話の内容は、ディオとディックにしか、わからないように、通信の前にイヤホンを付けてます。）

「名前は、わかるか？」
っとディオがきく。

『いや、あいつらなかなか仲間の名前を呼ばない。警戒しているのか、「君、お前、お主、」で読んでる。』っと答えるソロ。

「そうか。ありがとう」
っとディックが言うが・・・・

『それともうひとつ』っと真剣な顔と言い方でいう（通信機は画面？が写る通信機ってわかるかな？）。

「どうしたんだ？」っとディオが聞く。

『さっき、奴らの目的は、グラールの支配って言ったが、どうやらそれはおまけらしい、』っと言うソロ。
「何？じゃ、その5人の本当の目的はなんだ。」

『・・・・兄貴には、5人それぞれ違う種族ってのは聞いたか？』

「あぁ、聞いたが、それがど・・・・」っと言葉が失う。

「もしかして・・・・」
ディックがソロに聞く。
『あぁ、間違いない・・・・あいつら種族戦争を起こすつもりだ』
「なんだって」っと声を上げてしまうディオ。その声に、反応しディオに向く、客。
「すいません」っと謝り、小さい声で、ソロに聞く
「ま、間違いないのか？」
『あぁ、あいつらそんな話をしていた。・・・・聞き間違いであって欲しい。』っと悔しそうに答えるソロ。
『それに、あいつらの嫌なオーラの意味もわかった』
「なんだい？」っと聞くディック。
『あいつら・・・・転生を使ってる』
「転生だって？」
っとディックが聞く。
『あぁ、間違いない。凄いオーラを感じる。・・・・勝てないオーラを・・・・』
「・・・・わかった・・・・ありがとう。もう引き上げてもいいよ」
『わかった。これより帰還する』

少し間があく、すでに2人の飲み物は空だ。

「大変な事になったね」

「あぁ」

「・・・・」

「・・・・」

「さてと、話の続けよ・・・・」っと通信前の話をしようとしたが、

「あんた、いいのか！！種族戦争だぞ。そんな事が起きたら、世界がほろびるんだぞ」　っとディックに怒る。

ディックは

「わかってるよ」なぜか落ち着いてる。

「なぜ、そんな落ち着いていられるんだ。」っと聞くディオ。

「なぜって、あいつらにはまだ、種族戦争どころか、グラールの支配さえ出来ない。」っと答える。

「えっ？」

「考えてみなよ。今のグラール。みんな種族差別なく生活してるで

しょう。まず種族差別をするには、グラールを支配する必要がある。だけど、このグラールには、ガーディアンズ、同盟軍、ローグス、リトルウィング。ＳＥＥＤを封印した英雄のイーサン・ウェーバー。・・・・そして・・・・亜空間事件を解決した英雄、ルーク・フィレンこと、ディオ・ルタ・オルテガ。君たちの力が統一すれば大丈夫だよ」っと答えるディック。

「凄い自信だな？」

「自信じゃない・・・・答えさ。この世に強い絆を持てば、不可能を可能に出来る。君たちのその強い絆を力に変える。それが唯一、グラールを救う事であり、彼らに対抗出来る力。それが絆さ」

「・・・・」っとディックの言葉に言葉が出ないディオ。

「1人で戦うなんて、バカな事を考えない事だね。」

「あいつら、転生してるんだろ？」

「転生してるから、絶対に強くなるとは限らない。転生して、強くなったっと考えると必ず怪我をする。転生しても、かなり努力しないと、強くは慣れない。それに転生しても、必ず強くなる保証はない。逆に弱くなるかもしれない。・・・・。」っと悲しそうに言う。

「？」っと疑問そうにするディオ。

「昔いたんだよ、僕達の部隊に、転生して強くなったっと言っていい張って死んだ仲間がね。全くバカなやつだよ。」

「・・・・」

「グラールを救うためにはまず絆を掴まなければならない。今のグラールの絆よりも大きな絆が。彼らに支配されると、絆は簡単には崩される。そうなる前に・・・・・」

「そうだな。」

「ところで、エミリアちゃんから通信・・・・来ないね。心配してるはずなのに」

「エミリア達の通信は拒否にしてるからな。」っと答えるディオ。

「そっか、」

「・・・・」

「・・・・」

「まずは・・・・、」

「??」

「あんたの話を聞くのが先だったな?」

「そうだね」っと店員を呼び。

「??」

「コーヒーのおかわりください」

「あっ、俺も」

『はい、かしこまりました』っと店員がディオ達の席を外した。

「それじゃ、話そうか。僕達の絆を深めるために」

第二話：嘘と真実１（後書き）

ディオ「嘘と真実にあまり関係ないな」

なに、これからですよ。まだ１番目だから。

ディック「それは楽しみですね」

でしょう。君となら話が会うかも

ディオ「はぁ～」

ピピピッピピピッ

ディオ「？？」

通信？

ディック『僕だ』

ピッ

ソロ『誤字、脱字があったら教えてくれ』

第二話：嘘と真実２（前書き）

もう、ほとんどが会話です。
ディック「コーヒーおかわり」

ディオ「俺も、」

ちなみに飲み放題です。セルフサービス出はなく、店員が運ぶ珍しい店です。

店員『それでは、嘘と真実2、御覧下さい。』

第二話：嘘と真実2

～リトルウィング事務所～

「どうだ、見つかったか？・・・・わかった。調査を続けてくれ」

ピッ

「はぁ～、あの馬鹿、何処に、行きやがった。」っとクラウチが腹をたてている。そこへ、

「クラウチ、ルークは見つかったの？」っとウルスラがクラウチに聞く。

「いや、ルークが乗ってた船なら見つかったんだが、肝心の居場所までは、まだだそうだ。」右手で自分の頭をかくクラウチ。

「チェルシーは、店に来る客に聞いてるそうなんだけど、今のところ手応えがないみたい」っとウルスラも答えた。

「ナギサの方も数分前に、通信があったんだが、手応えがねぇそうだ。」

「そう、何もなければいいけど」

「ところで、・・・・エミリアの様子はどうだ？」っとクラウチが

ウルスラに聞く。
「いつもと変わらないわ。」っとウルスラが答えた。
「そうか。ルークがいなくなって、駄目になるかと思ったがなぁ。」
「『今度は、あたしがルークを助ける番』っと行って、探しに行ったわ」
「ホント、変わったよな。あいつ。」
「彼のおかげよね。あの子が変われたの」
「あぁ、そうだな」
「・・・・」
「んっ？どうした？」
「な、何でもないわ。」
「？？？」

・・・・数日前
「ルーク、ちょっといいからしら。」
「えっ？あ、はい。なんですか？」

「エミリアの事なんだけど」

「エミリアがどうかしたんですか？」

「別にどうかした分けではないわ。」

「はい？」

「あの子が変われたのは、自分のおかげでだ、って考えたりする？」

「いえ、ただ俺は、エミリアの変わるところをサポートしただけで、別に俺が変えたわけでは、ないですよ。・・・・なぜそんなことを？」

「前も、エミリアについて話した事、覚える？」

「同じような、話した気がしますね」

「そうね、じゃその後の話した事、覚える？」

「クラウチの家族の話？」

「その前よ」

「・・・・、あなたが、ふとっ彼女の前から消えるんじゃないかって、話ですか？」

「その通りよ」

「・・・・」

「ルーク？」

「大丈夫ですよ。エミリアの前からいなくなったりしませんよ。」

「それを聞いて安心したわ。・・・・いつまでもエミリアを守ってあげてね。1人でいるのは、寂しいと思うし、何よりあなたのパートナーでもあるからさ。」

「任せてください」

「頼もしいわ」

・・・・現在

「（あの時の話が現実になるとは、思わなかったわ。）」

「ウルスラ、大丈夫か？」

「えっ？ええ、大丈夫よ。それより、クラウチ、エミリアからの通信はあったの？」

「いや、まだだ。もう少しだと思う・・・・」

ピピピッピピピッ

「「！！！」」

「も、もしもしエミリアか？どうだっ・・・・どうしたエミリア？何で泣いてるんだよ？何？ルークを見つけただと？それでなんで泣いてるんだ？・・・・・・・・どういう意味だよ、それ・・・・」

・・・・数時間前

～ラッピーカフェ～

「なるほど、そういうことだったんだ」

「驚くのは、当たり前ですからね」

ディオとディックが雑談をしている。

「ところで、ミケの、『だよね～～』ってのは、なんだ？」っとディックに聞く。

「あぁ、それ？単なる癖だよ。」っと答えるルーク

「癖？」

「たまに、やるんですよ。相手を馬鹿にした言い方。やめなさいっと言っても聞かなくて」

「ミケのヒューマンのナノブラストは？」

「転生に失敗したんだ。」

「転生に失敗した？」

「僕達の転生機械はヒューマンはヒューマン、ニューマンはニューマの専用の転生機械なんだ」

「っで、間違えて、ビーストで転生したわけだ。」

「そういうこと。まさか、成功するとは思わなかったよ。今後こんな事がないように壊したよ。あっ、もう結構時間たったね。もうこの辺にしようか？」

「2ついいか？」

「なんですか？」

「あんた達の部隊の名前は？」っとディックの立ち上げ部隊に、ついて聞く。

「部隊の名前？そういえば言って無かったね。僕達の立ち上げた部隊の名前は、【一種族】部隊って言うんだ。」っと答える。

「えっ？い、一種族部隊？なんだよ、それ？」

「もともと僕達は、一種族だったのは、知ってる？ヒューマンによって、ニューマン、キャスト、ビーストが造られ、そして各種族の関係が悪化し戦争が起きた。戦争は終わっても、しばらくの間は、種族差別は続いたと思う。デューマンという新たな種族も誕生した。

今は種族差別っと言ったものはないけど、もし、種族差別があったとしたら、種族をなくし、皆が一種族になれば、種族差別もなくなると思うし、、戦争も起こらないと思う。そういう意味合いもあって一種族部隊にしたんだ。」っとディックが答えた。

「一種族か・・・・」

「例え一種族になっても差別は続くと思う。僕達は差別っと言ったものを無くしていきたい。種族差別が起きた場合、グラールが滅び、戦争が始まる」

「・・・・」

「そうなる前に、彼らを倒さなければ。」

「そうだな。」

「もう1つ聞きたいことはなんだい？」っとディックが言い、

「あんたも転生してるのか？」っとディオが聞く。

「うん、家の部隊で転生しているのは、僕と、ソロ、ミケの3人だよ」っとディックが答えた。

「わかった、」

「そろそろ、話も終わりにしよう。」

「そうだな。」

「何かあったら、連絡するしつ連絡先教えるから。」

「あんたからも連絡しろよ」

「わかってますよ。」

お互いに連絡先を交換する。

「じゃ、失礼します。お金の方は僕が払いますので」

「いいのか？」

「大丈夫ですよ。では、失礼します」っと会計をし、店を出たディック。そして、その後すぐに、ディオも店を出た。

～パルム大都市カフェ街～

ここに1人の少女と1人の少年が歩いていた。何やらぶつぶつ言いながら、歩いている。

「ルーク・・・・どこに行ったの・・・・・」

あまり元気のない言葉だった。

「エミリア。大丈夫か？」

っと少年が少女に声をかけた

「えっ？あ、うん、ごめんね、ユート。大丈夫だよ」

エミリアとユート、どうやら少女と少年はこの２人のようだ。

「エミリア、ルークがいなくなって、元気がないぞ。」っとユートが言う。

「だって、ルークがいなくなったの・・・・」

「エミリアのせいじゃないぞ！！」っとユートが言う。

「えっ？」

「クラウチだって、お前のせいじゃないって言ってるし、ルークだってそんなことを言うはずない」っとユートが言ったのだが

「何で、あんたがルークの思ってることがわかるのよ。」

「匂いでわかる。あいつには、そんなことを言わない匂いが。」

「そんなんでわかるわけないでしょう！！」っと怒鳴るエミリア。

「今、気にしてるのは、あたしが、お父さんに嘘を言っとけば、こんな事にはならなかった。それに・・・・あんぐらいで怒って飛び出したルークに怒ってやるんだ。」っとエミリアは言った。

「エミリア、お前なんだかルークみたいたぞ？」

「えっ？」

「エミリアがいなくなった時のルークに少し似てる。」

「でも、ルークみたいに強くなれない。」

「エミリアもずいぶん強いぞ。」

「ううん、あたしは強くないよ、お父さん達が心配しない様に、強くみせてるだけ・・・・」っと話していたエミリアだが

「この匂い・・・・・」

「えっ？」

「この匂い・・・・ルークの匂いだ」っと走り出すユート。

「えっ？ちょ、ちょっと待ってよユート。」ユートを追いかける、エミリア。

「あそこだ。あそこにいるぞ」っとユート

「はぁ、はぁ、ルーク！！」っとエミリアが呼ぶ。

・・・・しかし

「・・・・」ルークっと呼ばれた青年は無視して歩く。ルークと呼ばれた青年・・・・そう、エミリアのパートナー、ディオ（ルーク）だった。

「ちょ、ちょっと、ルーク！！」っと言ったエミリアだが
また、無視して歩くディオ（ルーク）
「お前！！」っとユートが走ってディオの腕を掴む。
そして、
「お前ら・・・・だれた？」っと言ったディオ（ルーク）に驚く2人
「誰って、何言ってるの？ルーク。」っと言ったエミリアは、泣きそうな声で言う。
「ルーク？悪いが人違いだ。俺の名前はルークじゃない」っと言いユートの手を自分の腕から優しく離させる。
「あんた、何言ってるの！！もしかして、まだ怒ってるの！！？」エミリアの目から涙がてできた。
しかし、ディオは
「あんたもしつこい人だな、俺はルークじゃないっていってんだろ！！」っと怒鳴るディオ（ルーク）。
「ルーク・・・・」
「まったく、」っと言い歩き出すディオ。そして惑星移動の大型船（電車みたいな乗り物）に乗るディオ。
「ルーク！！」っとエミリアが走り、今度はエミリアがディオの腕を掴む。

「いい加減にしろ！！」っとおもいっきりエミリアの手を離す。
「！！！」っと驚くエミリアを無視して船に乗るディオ。そして船は飛び立っていった。
「ルーク・・・・・」っと膝を地面に付け、顔を手でおさえ、泣くエミリア。
「エミリア・・・・・」ユートはエミリアに言葉をかけようとしたが、やめた。こういう時、なんと声をかけたらよいのかわからなかっのである。
っとその時、
エミリアがクラウチに通信をした。
「もしもし、お父さん。」
『も、もしもしエミリアか？どうだっ・・・・どうしたエミリア？何で泣いてるんだよ？』
「実は、ルークを見つけたの。」
『何？ルークを見つけただと？それでなんで泣いてるんだ？』
「もう、ルークは・・・・ルークじゃない。あたしの知ってるルークは・・・・もう、何処にもいない！！」
『・・・・・どういう意味だよ、それ・・・・』

〜〜〜〜

『・・・わかった、お前ら、とりあえず、戻ってこい。』

「わかった」

「大丈夫か？エミリア」っとユートがエミリアに聞く。

「うん、大丈夫。とりあえず帰ろ。」っとエミリアとユートは船に向かって行った。

その光景を見ていたディックが。

「本当に、よかったんですか？ディオ君」っと呟いた。

第二話：嘘と真実２（後書き）

まだまだ嘘と真実は・・・・

ユート「お前がエミリアを泣かしたな！！」

な、泣かしたのはルーク（ディオ）で

ユート「ルークがエミリアを泣かすわけがない」

ちょ、ちょっと、待てユート話を・・・・ぎゃ～～

エミリア「・・・・」

ディック「誤字、脱字がありましたら、教えて下さい（ぼそぼそ）」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4736z/

ファンタシースターポータブル２i～異世界の５人～

2011年12月26日00時47分発行